

〔倭訓栞前編四〕うそ 虚偽をいふ、浮虚の義なるべし、或はをその轉、をそは古語也。

〔玉勝間 十一〕そらごとをうそといふ事

萬葉四の卷に、逢見ては月もへなくにこふといはゞをそると我をおもほさむかも、又廿四の卷に、からすとふおほをそ鳥のまさてにも來まさぬ君をころくとぞなく、此歌の意は、そのごとくまさしく來もし給はぬ君なる物を、鳥といふ大虚言鳥の、此來くと鳴ことよといへる也、ころくは、ろは例のやすめ辭にて、こは此にて、此所へ來といふこと也、子等來にはあらず、すべて子には古故などの字を書る例なるに、これは許字を書たり、そのうへ來まさぬ君とは、女の男をさしていへる言なるに、そを子等といふべきにあらざり、さて清輔の朝臣の興等抄に、或人云、ひむかしの國の者は、そらごとをば、をそごと、いふ也とあり、上件の万葉四の卷なるは、東人の歌にはあらざれば、いにしへは、をそといふ言、京人もいひし也、かくてをそは、すなはち今の世にうそといふ言、これ也、をとうとは殊にしたしく通ふ言也。

〔嬉遊笑覽禽十二〕嘉多言に、獺をかはうそと云は、苦しかるまじき歎、をそは、たはれ尾とよめり、此けだ物尾をふりて、人をばかすといへり、世俗に偽をうそといふこと葉も、是れより起れりと云り、今うそつき彌二郎、藪の中で屁をひつたと、童のいふことも、是よりなるべし、嘉多言に、をそは、たはれ尾とよめりとは、萬葉をいへるなんめれど、それは於會の風流士とよみて、おそは癡鈍の義にて、オヲとかなもたがひたり、たはれをば風流士にて、獺の尾にはあらず、されども今の諺は、件の間違ひたる説を取べし、しやばで見た彌二郎といふ事もあり、彌二郎に義なし、權兵衛、八兵衛も同じ、○中略

藪の中で屁を放たといふは、獺と鼬の混ひたるにやともおもへど、さにはあらじ、人のみぬ所なれば、偽るよとの意と聞ゆ、安布良加須尻の穴より煙たつなり、くひあひて術なさうなるみぞい